しんれいやぐちのわたし

神霊矢口渡

〔解　説〕

明和七年（一七七〇）江戸外記座初演。江戸時代の学者にして戯作者でもあった平賀源内こと福内鬼外の作。現在も大田区矢口にある新田神社の縁起にまつわる物語です。新田義貞の息子義興は、鎌倉の足利氏を責める途中、謀られて矢口の渡し場で非業の最期を遂げ、その史実が題材となっています。中でも四段目「頓兵衛内の段」が度々上演されています。

〔頓兵衛内の段　あらすじ〕

義興が六郷の川で舟に細工をされて討ち死にしたその際に、渡し守として計略に荷担した頓兵衛は、多額の褒美を手にし豪勢な生活をしていました。あるとき新田方の落人である義興の弟、義岑と連れの臺（うてな）が渡し場に現れ、川を渡してほしいと頓兵衛の娘お舟に頼みます。義岑を一目見て恋に落ちたお舟は、なんとか想いを遂げようと家に泊めるのですが、お舟に言い寄る使用人の六蔵に義岑の正体を見破られてしまいます。義岑を捕らえようとする頓兵衛が床下から刀を突っ込むのですが、そこにいたのは娘のお舟でした。強欲な父を諌め、己の恋路が未来で叶うようにと嘆願するのですが、頓兵衛は聞く耳を持ちません。頓兵衛は娘をなじり、舟で義岑らを追います。残された瀕死のお舟は、捕り手達が示し合わせた太鼓の合図を知っていたため、生け捕ったことを知らせる嘘の合図の太鼓を、義岑を助けたい一心で打つのでした。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

頓兵衛内の段

一間に入り給ふ。跡打ち眺め娘のお舟、

「ほんに美しいといはうか、可愛らしいといはうか、とても女子に生るゝならあんな殿御と添ふてみたい。それはそふとあの女中、兄弟なりやよいが、もし夫婦ならわしや何とせふ、どうせふ」

と、おぼこ娘の一筋に思ひ乱るゝ糸芒（すすき）、穂に顕はれて見えにける。義岑（よしみね）公は一間を立ち出で、

「申し〳〵お女中、連れの女が薬たべるお湯の無心」

と宣へば、娘は『はっ』と手をもち〳〵、

「申し、旅のお方さんえ。お前にちつと御無心がござんする」

「これはしたり、かふお世話になるからは、何なりとも御遠慮なう」

「アイ、アノ、連れの女中様は妹御でござんすか、御内儀様でござんすかえ」

「これはさて、変つた事に御念が入る」

「アイ、妹御ならよふござんすが、もし御夫婦なら、こっちにちっと済まぬ訳がござんする」

「成程、あの女は私の妹。久々の病気故保養がてら浅草の観音様へ連れて参詣致しまする」

「アヽ嬉しや〳〵。それ聞いたらもう何もかも要りませぬ。お前、どふぞわしが内に十日も二十日も十年も百年も、逗留なされて下さりませ。したが、わしらが様な田舎者は相手になるもお嫌であらうけれど、エヽ、もう、つんと、わしにばつかり物言はせ、コレイナ〳〵、こちら向いて下さんせ」

と、右よ左と付け回す、琥珀の塵や磁石の針、粋も不粋も一様に、迷ふが上の迷ひなり。

「これ程思ひ詰めたものを返事のないはお胴慾。なんぼ田舎生れでも、惚れたが因果、惚れられたが不祥と思ふて下さんせ。日蔭の木々も花咲けば、岩の狭間の溜まり水、清(す)めば住む世の思ひ出に、叶へてやらふとつひ一口、言ふてくれたがよいわいな」

と、縋り付いたる袖袂、触らで落つる玉笹の、あられもないが恋路なり。

「ムヽ、それ程迄に思ふて下さるお志、さら〳〵仇には思ひませぬ」

と、ぢつと締めたる手の内は、離れ難なき風情なり。

時に不思議や義岑公、娘も共に色変り、『ハツ』と身震ひ忽ちに、どつかと倒れ息絶へたり。音に驚き駆け出る臺、

「コリヤ何事」

と狼狽へながら、柄杓の水を口移し、介抱しても呼び生けても、その甲斐さらに詮方も、思ひ付いたる機転の臺、

「さては娘の色香に迷ひ、心の穢れ、御旗の咎めなるか」

と手を清め、義岑公の懐へ手を差し入れて件(くだん)の御旗、さつと開けば忽ちに、二人は夢の覚めたる心地。表の方には六蔵が、戻りかゝつて窺ひ足。義岑公辺りを見廻し、

「この家に泊りて窺ひ見れば、家業に似ざる普請の結構。様子といひ場所といひ、方々以て心得ずと、娘が恋慕を幸ひに問ひ落とさんと思ひし故、近寄れば今のしだら。子細ぞあらんこの家の内」

と、御旗を取つて巻き納め、

「臺、来たれ」

と引連れて、奥の一間に入り給ふ。

後にしよんぼり本意(ほい)なげに、何と詞も投げ首し、方便(たつき)も知らぬ海中(わだなか)に、楫(かじ)なきお舟が物思ひ、打ち萎れてぞ居たりける。表に控へし六蔵は、木部屋に隠せし一腰ぼつ込み、

「あの旗を持つからは、紛ひなき新田方の落人。合図の狼煙を上げふか、イヤ〳〵討手を引き受け討たせては手柄にならず。抜け駆けし搦め取つて褒美の金、俺一人でせしめてくれん。うまい〳〵」

と頷き〳〵、奥を目がけて駆け入るを立ち塞がつて、

「コレ六蔵、そなたは奥の旅人を何とせふと思やるぞ」

「ヤア、何とゝは知れた事。さつきにとくと見ておいた、中黒の旗持つからは紛れもなき新田、おつとどつこい新田の落人義岑に違ひはない。去年親方と相談して舟底を刳り抜いて義興を殺す時は、命懸けの事手伝はせ、御褒美を貰ふ時は親方一人で温まり、この六蔵はおちやつぴい。出物になつて今この態（ざま）。その弟の義岑、今度は俺が生け捕つて、御褒美丸で温まり、俺も出世をせにやならぬ。が、邪魔なさるりや御主とて容赦はない」

と、留めても留らぬその勢ひ。一間に立ち聞く義岑公、娘は一途に恋の邪魔、払はんものと思案を定め。

「オヽ無理にそなたを留めはせぬ、ガなんと言ふても相手は武士、もし仕損じまいものでもない。モ僅かの褒美に目がくれて、わしが言ふ事を聞かぬからは、これまで何のかのと言やつたは、アリヤ皆嘘かや」

と、言はれてびつくり、

「エヽ、そりやお前ほんの事か。イヤ〳〵〳〵、アノ奥の男めに気がある故、俺を留めうといふ謀（はかりごと）。そふうまくは、へヽ参りますまいへヽヽヽヽ」

「イヽヤイノウ、そなたの心を見た上と思ふてゐた故、これまでは返事もせなんだ。ガそれともに疑やるなら、ハテモそなたの勝手にしたがよい」

と、ぴんとねられ六蔵は、悪寒熱頭に湯気、

「こいつはえいわい〳〵、こいつは余程よいわいやいアハヽヽヽヽ。そんならお前はこの六蔵が性根を見たその

上では、決ってくれるといふ肚(はら)か」

「サイノ、そなたがわしと夫婦になりや、父様の為に子ぢやないか。親子の間に抜け駆けして一人の手柄にするにや及ばぬ。父様は庄屋殿へ往てなれば、とつくと相談した上で、ハテどう共したがよからう」

と、口へ出まかせ間に合ひを、言ふて水棹(みさお)や詞の楫、渡りに船と六蔵は、乗せ掛けられてふはと乗り、

「こりや近年にない良い目が出たわいハヽヽヽヽ。そんならわしは庄屋へ往て親方を連れて来ふ。ガ奥の奴らを逃がさぬ様、気を付け給へ、エヘン、サ女房ども」

と、伸びた鼻毛のとちめんぼう、振り廻してぞ出でて行く。『しすましたり』と門の戸の、懸金掛けてとつかはと、一間の内へ入りにける。

かくて時刻も久方の空冴え渡る冬の夜の、二十日亥中(いなか)の月出でて、遠寺(えんじ)の鐘のかう〳〵と、いと物凄き門口の、一群茂る薮の中、ぬつと出でたる主の頓兵衛、『時分はよし』と呼子の笛、塀の陰より下人の六蔵、頓兵衛小声に、

「コリヤ〳〵六蔵、娘めが目を覚まし邪魔ひろげば七面倒。物音のせぬ様に俺一人で忍び入らん。手前は表に気を付けて、もし逃げ出ださば討ち取れよ」

「オツト合点」

「コリヤ。シイ」

と引寄せて耳に口、

「ナ」

「ン」

「ナ」

「ン、ンヽヽヽ」

頷き囁き六蔵は、元の木陰に身を忍ぶ。頓兵衛は門の戸を、引けどしやくれど開かざれば、大だら引抜き壁切り開け、這入れば吹き込む川風に、灯火消えて真の闇。勝

手覚えしわが内も、欲に心の暗紛れ、忍べばいとゞ身も重く、床はぎち〳〵足音の、耳へ這入れば立止まり、一息ほつと次の間へ、又も踏み出す足の下、ぴつしやり、

「アイタ。エヽ鈍くさい」

と心では、怒りながらもそつと投げ、難なく忍ぶ亭座敷、梯子の上へ二足三足、

「イヤ〳〵〳〵、彼奴も名に負ふ義興が一族なれば強者」

と、心で頷きそつと降り、下屋へ回つて探り寄り、闇にも光る段平を、抜いて突込む二階の板、上には『わつ』と魂切る声、

「してやつたり」

と刃物引き抜き血押し拭ひ、二階の梯子駆け上がり。障子蹴放し月影に、夜着引きまくり見てびつくり、

「ヤア、ヤヽヽわりや娘か、お舟か」

と驚きながら。

「義岑と女めはいづくへやつた。有様に抜かせ、エヽ抜かせ」

と、怒りの大声、娘は顔を打ち眺め、

「申し父様、浮世に生れた人ごとに、欲を知らぬはなけれども、お前の様に凝り固まり、仏とも法とも弁へず、人は死なうが倒れうが、我さへよければ構はぬと、身勝手ばかりの強欲非道。あらふ事か源氏の大将、義興様をたばかつて、むざ〳〵と殺したるその天罰が我が子に報ひ、宵に泊りし旅の御方、義岑様とはつゆ知らず、可愛らしい殿ぶりに、恥かしながら心の迷ひ。御傍へ寄れば恐ろしや、御旗の咎め。義興様の御怒りにて悶絶せしも、さうとは知らぬ恋路の闇。最前六蔵を追ひ出だし一間へ忍び、様々と嘆きしに、義岑様の仰るには、『兄を殺せし頓兵衛が娘故、この世で添ふ事ならねども、親と一緒でないといふ、一つの功を立つるなら、未来で添はふ』と

仰つた、その一言がわしや嬉しい。この内にお出であつては御身の上も心許なく、委細の訳を打ち明けて、月の出ぬ間を幸ひに、舟にて落とし参らせし」

と、聞くより頓兵衛地団太踏み、娘が髻(たぶさ)引掴み、

「おのれは〳〵、エヽ大胆千万。見ず知らぬ男に惚れくさつて、親の大事を他人に打ち明け、手に入つた代物をマよふも〳〵落としおつたな。あの落人を取り逃がしてこの親が立つものか」

と、突き退け刎ね退け行かんとす、娘は袖にしがみ付き、

「マア〳〵待つて下さんせ」

「エヽ放せ」

「マア〳〵待つて下さんせ」

「エヽ放せ」

「マア〳〵待つて下さんせいなあ。異見言ふても嘆いても聞き入れもなき無得心。母様がござるなら仕様模様もあらふもの。何を言ふても身一つに思ひ詰めたる義岑様、この世で添はれぬ悪縁と、聞けば聞く程猶恋しく、御手に掛つて死んだなら、親と一つでないといふ、言訳立たば未来にて、いとし殿御に逢はれうふと、それを頼みに二つには、一人の娘が先立たば、一念発起もし給ひてお心も直らふかと、果敢(はか)ない事を頼みにて、覚悟極めて死にまする。娘可愛いと思すなら、御心を翻へし、義岑様を助けてたべ。頼みまする」

と口説き立て、『わつ』とばかりに伏し沈む、血汐に争ふ血の涙、不便(ふびん)といふも愚かなり。頓兵衛はせゝら笑ひ、

「ハヽヽヽヽ。この年まで仕込んだ根性、釈迦如来が元服して、謝り証文書かうと言ふても、いつかな〳〵翻さぬ。合図を定めた義岑めを取り逃がしては、竹沢様へ約束の、面が立たぬ」

と、娘を取つて突き飛ばし、仕掛けし烽火(のろし)に火打ちの早

業、天を焦がせる炎の光、かねて合図の村々より、人を集むる法螺(ほら)吹き立て、勢ひ込んで走り行く。娘は苦しき身を焦り、

「村々より大勢にて取り巻かれ給ひなば、何とて御命あるべき」

と、天に憧れ地にひれ伏し、正体涙の暇よりも、思ひついたる一思案、上なる太鼓にきつと目を付け、

「この太鼓を打つ時は、生捕りしと心得て村々の囲みを解くと最前聞いたが天の与へ。こゝぞ殿御へ心中の女子の操」

と一筋に、思ひ付いたる心の誠、よろめく足を踏みしめ踏みしめ。身軽に立ち出で頓兵衛が、繋ぎし船に飛び乗つて、櫓を押し立てゝ漕ぎ出す。

漸々枹(ばち)を振り上げて、打たんとしても手は届かず、伸び上がつてはよろ〳〵〳〵、また起き直つて飛び上がり、『どん』と一声かつぱと伏す。またもや枹(ばち)を振り上ぐる、『オツト任せ』と後より、枹引たくる六蔵が、脇差引抜き切り付けられ、欄干より真逆様、川へざんぶり水煙。

上には娘が詮方も、落ちたる鞘を振り上げて、滅多無性に打つ太鼓、娘は死出の断末魔、夫を慕ふ執着心、蛇ともなるべき日高の川、領(ひれ)布振る山の悲しみも、これにはいかで勝るべき。後は間遠に鳴る太鼓、遥かに隔たる川向ふ

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。